

[20]

氏 名	堀内 泉 <small>ほりうち いずみ</small>
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学 位 記 番 号	心博第 42 号
学 位 授 与 の 日 付	2022 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	高齢者介護福祉分野に勤務する介護職員の 介護観と離職意向の検討
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 串崎 真志 副 査 教 授 阿部 晋吾 副 査 准教授 杉本 英晴

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、高齢者介護福祉分野に勤務する介護職員の離職意向を低減させる要因と、そのメカニズムについて検討したものである。本論文は 8 章から構成されている。第 1 章では、高齢者介護福祉分野に勤務する介護職員の離職意向をめぐる現状とその要因について整理し、本論文で焦点を当てる要因として、生活者の介護観を定義した。続いて第 2 章～第 7 章では、高齢者福祉分野に勤務する介護職員への調査を繰り返し、生活者の介護観その他のパーソナリティ要因と離職意向の関連を検討し、そのメカニズムについて考察した。第 8 章では総合考察を行った。要旨は以下の通りである。

**第 1 章**では、最初に我が国における社会問題である介護人材の不足と早期離職問題、介護サービス業のイメージ、介護職員の専門性などを概観した。次に、介護労働者はストレスが高くバーンアウトを引き起こしやすいこと、さらに離職に影響するさまざまな要因について先行研究を概観した。そして、介護職員の離職に関連するパーソナリティ要因として、介護職員のもつ介護観（援助観）に注目し、特に、介護職員が職務を遂行する際、「自分も利用者と同じ生活者であるという感覚をもつこと」を生活者の介護観と定義した。生活者の介護観は仕事に対する満足感ややりがいを高め、離職意向を下げるという仮説を述べた。

**第 2 章**（研究 1）では、介護職員 256 名を対象に、仕事満足、生活満足、ワーク・ライフ・バランス、離職意向の関連を調査した。その結果、仕事満足とワーク・ライフ・バランスは離職意向と負の相関を示したが、生活満足と離職意向は無相関であった。

**第 3 章**（研究 2）では、介護職員 224 名を対象に、生活者の介護観尺度を作成し、従来の介護観尺度と併せて検討した。その結果、予想に反して、生活者の介護観は、年齢・性別・資格・役職・雇用形態と関連しないことが明らかになった。

第4章（研究3）では、介護職員200名を対象に、感覚処理感受性、生活者の介護観、離職意向、バーンアウトの関連を調査した。その結果、生活者の介護観と離職意向は無相関であった。また、感覚処理感受性が高いとバーンアウトしやすく、その影響で離職意向が高まるという間接効果が見出された。

第5章（研究4）では、介護職員218名を対象に、仕事満足、生活満足、生活者の介護観、従来の介護観尺度、離職意向の関連を調査した。その結果、生活者の介護観と離職意向はやはり無相関であった。そして、生活者の介護観が高いと仕事満足と生活満足が高く、その影響で離職意向が低くなるという間接効果が見出された。また予想に反して、生活者の介護観は、介護職経験年数と関連しないことが明らかになった。

第6章（研究5）では、介護職員150名を対象に、介護実践技術、生活者の介護観、離職意向の関連を検討した。その結果、生活者の介護観と離職意向はやはり無相関であった。さらに、生活者の介護観は、介護職経験年数と有意であるが相関係数は小さかった。そして、介護実践技術も離職意向と有意であるが相関係数は小さかった。また、勤続年数が長いほど介護実践技術が上がり、その影響で生活者の介護観が高まるという間接効果が見出された。

第7章（研究6）では、介護職員2名を対象に、生活者の介護観、バーンアウト、離職意向についてインタビューを実施した。その結果、生活者の介護観が高いことでバーンアウトや離職意向が低く抑えられている場合と、生活者の介護観が低くバーンアウトは高いが、仕事への取り組みを工夫することで離職意向が低く抑えられている場合があることが見出された。

第8章では、総合考察を行った。研究1～研究6の結果を整理した上で、生活者の介護観は離職意向を直接、減少させないこと、生活者の介護観が高いと仕事満足や生活満足が高くなり、その影響で離職意向が低くなるという間接効果に言及した。とはいえ、間接効果の説明率はそれほど高いものではないことから、生活者の介護観は離職意向を低減するというよりも、介護職員の専門性やリーダーの資質を高める要因である可能性を考察した。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、介護分野の人材不足と人材確保に取り組むべく、介護職員の離職意向に対して、生活者の介護観という新しい視点からアプローチした試みである。生活者の介護観尺度を作成し、調査を重ねた結果、それは離職意向と強く相関するものではなかったが、生活者の介護観をもつことが介護の質を高める可能性を示唆しており、介護観に関する基礎研究として意義あるものといえる。

以下に、心理学研究科が定める博士学位論文審査基準（課程博士）に従って、審査委員の見解を述べる。

**1. 問題意識が明確で、課題設定が適切であること**

介護職員の離職問題に取り組むという意識が明確である。生活者の介護観尺度を、離職意向に相関する諸要因とともに調査を重ね、一部の仮説はやや無理があるものの、概ね適切に検討している。

**2. 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること**

国内の研究については適切に吟味されている。一方、国外の研究をもう少し踏まえることが望まれる。

**3. 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること**

研究目的に照らして概ね適切に分析しているが、分析方法の理解や記述に一部、十分でない点が見受けられる。特に本論文の中心となる尺度の作成においては、もう一歩踏み込んだ分析と改訂を必要とし、媒介効果や調整効果も含めて、さらに丁寧な検討を行うことが望ましい。

**4. 論文構成が的確で、論理的展開に整合性、一貫性、説得性があること**

全体として概ね的確であるが、介護観を導出する理論的展開が十分でなく、生活者の介護観が離職の防止につながるという理論的根拠も乏しいように思われる。

**5. 全体を通して学術的な独創性が認められること**

生活者の介護観の概念は、著者の経験をふまえた独自の視点であり、本論文で十分に検証されたとはいえないものの、学位論文にふさわしい学術的な独創性を有すると評価できる。

**6. 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること**

本論文は、介護職員の離職に取り組むという社会的意義の高い研究であり、介護観の基礎研究の一つとしても貴重である。公開口頭試問のプレゼンテーションも適切であった。

以上のように、研究を重ねることによって得た知見は、博士論文審査基準からみて適切だと判断できる。よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。